

サニナビ

北九州



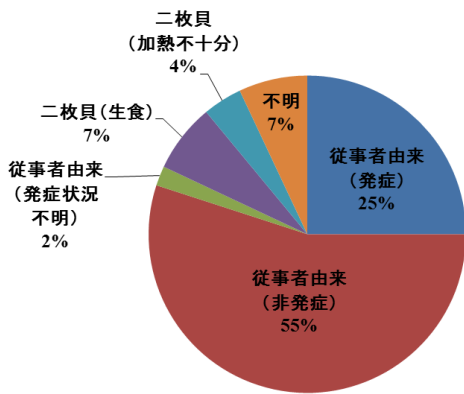
北九州市保健所
 東部生活衛生課
 広域食品指導係
 小倉北区西港町 94-9
 TEL 093-583-2048
 FAX 093-583-2044

【ノロウイルス流行の季節が近づいてきました】
 【ノロウイルス食中毒の原因は、約80%が調理従事者由来】

ノロウイルスの発生は一年を通して見られますが、11月頃から発生件数は増加しはじめ、12月から翌1月が発生のピークになる傾向があるため、これからの季節は特に注意が必要です。

ノロウイルス食中毒の約80%は調理従事者が原因です。ノロウイルスは感染力が非常に強く、少量のウイルス(10〜100個)で感染・発症するため、調理従事者の健康管理と汚染防止の対策が重要になります。

ノロウイルス食中毒の発生原因(平成28年)



参考: 薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会食中毒部会 配付資料

【使い捨て手袋、正しく使えていますか?】
 今回はノロウイルスに限らず、食中毒の

予防対策のひとつとして、「使い捨て手袋」の衛生的な取扱い方について取り上げます。



手袋を着用している「だけ」では安全ではありません。平成28年に起こった食パンを原因としたノロウイルス集団食中毒事件では、使い捨て手袋を着用していましたが、手袋の着用や交換に関する明確なマニュアルは整備されておらず、不十分な衛生対策が食中毒発生の要因だと推測されました。このため、手袋の正しい使い方の周知徹底が必要です。

★「使い捨て手袋」を着用する目的

食中毒を引き起こす細菌やウイルスを手指から食品に付着させないため。

★手袋着用時の注意点

- ・手袋を使用しているから安心という過信から、着用前の手洗いが疎かにならないようにしましょう。
- ・着用前の手袋は、衛生的で取り出しやすい場所に保管しましょう。
- ・手袋を取り出す際は、手指から手袋表面への汚染を最小限にしなければいけません。そのため、手袋の端(手首の部分)のみをつまんで取り出し、装着しましょう。

★「使い捨て手袋」交換のポイント

- ・トイレ後など、手洗い後に交換するのはもちろんですが、盛り付け作業の切れ目や、消毒していない器具や設備に触ったとき、調理帽やマスクをつけ直したときにも交換しましょう。
- ・二次汚染を防ぐため、一度使用した手袋は使い回しせずに必ず捨てましょう。
- ・手袋を交換しないまま長時間経過すると、手袋内部で細菌(黄色ブドウ球菌等)が増殖してしまいます。発汗があれば湿度が高くなる上に、増殖した細菌が手袋内に広がり、もし手袋にピンホール(小さい穴)等があれば食中毒に直結します。長時間の使用は避けましょう。

★「使い捨て手袋」の着脱方法

廃棄時にも使用後の手袋表面が調理台や器具等を汚染しないよう、手袋の端(手首の部分)をつまんで手袋の外側が内側になるように、裏返ししながら片方の手袋を外します。外した手袋を握った状態のまま、脱ぎ終わった手指で反対の手袋の端をつまんで反転させ、両方の手袋をまとめてゴミ箱に廃棄します。



手袋の端をつまんで、外側が内側になるように。



反転させ、両手袋まとめて直接ゴミ箱へ。

【生野菜や果物は正しく殺菌しましょう】

【生野菜が原因と疑われる腸管出血性大腸菌食中毒・感染症が発生】

今年5〜6月に東京、埼玉、茨城、福岡の4都県で計27人(うち不顕性感染者1人)が感染した腸管出血性大腸菌O157による食中毒・感染症は、原因食品として「サンチュ」が疑われています。厚生労働省の発

表によると、4都県の高齢者施設や飲食店で感染した27人は、いずれも千葉県内の同じ業者が生産した「サンチュ」を食べていました。

【なぜ農産物に大腸菌がついているの?】

もともと牛などの動物の腸内に存在する腸管出血性大腸菌が野菜などの農産物を汚染する要因としては、牛糞を用いた堆肥の発酵が不十分で菌が残っていたり、雨などで家畜の排泄物が畑に流れ込むことが考えられています。

「サンチュ」が原因と疑われる食中毒・感染症事案を受けて農林水産省は、消費者へより安全な野菜を供給するため、改めて「栽培から出荷までの野菜の衛生管理指針」に基づく野菜の衛生管理の取組の徹底を進めることとしました。

【生野菜・果物の正しい殺菌方法】

厚生労働省では、「大量調理施設衛生管理マニュアル」において、生食用の野菜や果物は流水で十分洗浄し、高齢者、若齢者及び抵抗力の弱い者に提供する場合には、次亜塩素酸ナトリウム等で殺菌した後流水で十分すすぐことを求めています。このとき、次亜塩素酸ナトリウム溶液は、「200ppmで5分間又は100ppmで10分間」で必ず「食品添加物」の表示のあるものを使用してください。また、シタスなどの葉菜類は、一枚ずつはがして洗浄・殺菌を行ってください。

編集後記

日増しに秋も深まり、朝夕は肌寒く感じるようになりました。今月の写真は、「鹿」です。

